

店じまい直前・独占インタビュー

「4月からは、原稿持ってきてもらえないから」。

論説委員室を訪ねると、大熊由紀子さん(60)は「朝日新聞での店じまい」に向けて大忙しでした。

女性が定期採用されていなかった時代に入社。女性の記者・社員の先駆けの一人として、会社に働きかけて働く条件を整え、多くの後輩女性を心身ともに支えたキーパーソンでした。

4月からは、大阪大学大学院人間科学科教授として、東京と大阪を行き来するそうです。「辞めたいと思ったことは一度もない」という約40年間の記者生活を、語ってもらいました。

2001年(平成13年)3月16日 金曜日 朝日新聞 夕刊



発行所 東京都千代田区朝日 朝日新聞東京本社 電話 03-3542-0131

別冊の特集のご用命は 遠慮出版へ 社員も募集中 委細面談

大熊由紀子さんが朝日を「卒業」 「丸刈り」から介護まで多彩な仕事

「100からは、原稿持ってきてもらえないから」。朝日新聞の論説委員室を訪ねると、大熊由紀子さん(60)は「朝日新聞での店じまい」に向けて大忙しでした。女性記者の先駆けの一人として、会社に働きかけて働く条件を整え、多くの後輩女性を心身ともに支えたキーパーソンでした。4月からは、大阪大学大学院人間科学科教授として、東京と大阪を行き来するそうです。「辞めたいと思ったことは一度もない」という約40年間の記者生活を、語ってもらいました。

4月から阪大教授に 「店じまい」直前独占インタビュー

「100からは、原稿持ってきてもらえないから」。朝日新聞の論説委員室を訪ねると、大熊由紀子さん(60)は「朝日新聞での店じまい」に向けて大忙しでした。女性記者の先駆けの一人として、会社に働きかけて働く条件を整え、多くの後輩女性を心身ともに支えたキーパーソンでした。4月からは、大阪大学大学院人間科学科教授として、東京と大阪を行き来するそうです。「辞めたいと思ったことは一度もない」という約40年間の記者生活を、語ってもらいました。

女性記者の先駆け40年

「100からは、原稿持ってきてもらえないから」。朝日新聞の論説委員室を訪ねると、大熊由紀子さん(60)は「朝日新聞での店じまい」に向けて大忙しでした。女性記者の先駆けの一人として、会社に働きかけて働く条件を整え、多くの後輩女性を心身ともに支えたキーパーソンでした。4月からは、大阪大学大学院人間科学科教授として、東京と大阪を行き来するそうです。「辞めたいと思ったことは一度もない」という約40年間の記者生活を、語ってもらいました。



海外出張ではありません。スーツケースには資料がいっぱい

自殺防止！ ネットつくる

女性たちの自殺防止のために、ネットをつくる。大熊由紀子さんが、女性記者の先駆けとして、会社に働きかけて働く条件を整え、多くの後輩女性を心身ともに支えたキーパーソンでした。4月からは、大阪大学大学院人間科学科教授として、東京と大阪を行き来するそうです。「辞めたいと思ったことは一度もない」という約40年間の記者生活を、語ってもらいました。

女性たちの自殺防止のために、ネットをつくる。大熊由紀子さんが、女性記者の先駆けとして、会社に働きかけて働く条件を整え、多くの後輩女性を心身ともに支えたキーパーソンでした。4月からは、大阪大学大学院人間科学科教授として、東京と大阪を行き来するそうです。「辞めたいと思ったことは一度もない」という約40年間の記者生活を、語ってもらいました。

「社説105年の歴史で、女性論説委員の登場は、はじめて」 — 1984年10月19日付の天声人語より

今年、本誌が創刊105周年を迎える。105年という長い歴史の中で、女性論説委員の登場は、はじめてである。1984年10月19日付の天声人語に、大熊由紀子さんが、女性記者の先駆けとして、会社に働きかけて働く条件を整え、多くの後輩女性を心身ともに支えたキーパーソンでした。4月からは、大阪大学大学院人間科学科教授として、東京と大阪を行き来するそうです。「辞めたいと思ったことは一度もない」という約40年間の記者生活を、語ってもらいました。

後輩たちは……「かわいい子にはその母を旅させよ、です」「1日30回、やめようかと考えた」

—1963年の入社、ですよね。なぜ、新聞記者を目指したのですか。大学で科学史・科学哲学史を専攻していて、科学ジャーナリストになって科学の楽しさを

人々にわかってもらおう、と思ったのが私の動機。

会社の動機は、東京五輪を控えて、女子選手村はオリンピックの花。でも、男子禁制。仕方ない、女を採るか、と。

当時、有馬真喜子さんや松井やよりさんたち、英語とフランス語に堪能な女性が既におられ、私は英語が苦手ドイツ語で受験したのが功を奏したみたい。

ー入社して、すぐ五輪の仕事をしたのですか。

社会部の西部支局、中野の焼き鳥屋の3階に、竹内宏というすごく厳しい支局長がいて、その人がまず松井さん、次に私の育て役になりました。「竹内女学校」なんて言われて。その竹内さんが小さな黒い手帳（住所録）をプレゼントしてくれて、「ここにこれから書く人が君の財産である」と。手帳はどんどん換えて、今、4700人くらい住所録ソフトに登録してあって、約3000人と年賀状交換しています。

「十を取材して、一を書け。一を聞いて十を知ってはいけない」とも言われました。その結果が、資料の山。リュックをしょって、スーツケースを引いて歩いている今の私の姿です。

ーどんな仕事をしましたか。

あるとき、養護施設にプールを寄贈した人がいて、「恵まれない子にプールの贈り物」と書いたら、竹内支局長にこっぴどくしかられた。「読んだ子どもたちがどう思うか」「だいたい君は、この子たちが恵まれないかどうか、知っているのか」……。

深く反省しました。してあげる側の視点だけで書いていた。

それから美談をそのまま書かなくなりました。

オリンピックでは、優勝候補だったソ連のやり投げの女性選手が、勝てなくて坊主刈りにしたという話をビューティーサロンで取材して特ダネで書きました。

（'64年10月17日朝刊「外国娘の根性？涙ため丸坊主 競技に敗れ選手村で」）

ー科学部時代で、印象に残る仕事は。

娘を妊娠したことをきっかけになって「日赤病院の院長が高齢と病気で目が見えないのに手術をして、ミスが相次いでいるらしい」という情報を知らせてくださった方がいて、何カ月も取材し原稿にしました。でも、なかなか載らなかった。

ー整理部デスクのところまで、お願いに行っただすよね。院長は大熊さんの名刺も読めなかったと。約1カ月載らなかったそうですが本当の理由は何ですか。

「どこどこの調べによると」というのがないからダメ、というのが一番の理由でした。朝日新聞が責任のすべてを負わないとなくなるって。「調査報道」という言葉もまだなかった。

（'69年9月1日夕刊「老院長に退職勧告 日赤産院手術の“ミス”続く」。院長は年末に辞任した）注①

あと、和田心臓移植。移植のすぐ後にやった座談会で和田さんがいくつかウソをついてい

て、おかしいと思った。「移植を受けた青年が死んだから批判を始めた」と言われるけれど、違う。注②

核燃料騒動のときは孤独でした。新聞社には、「市民運動の人たちがいうことは応援しなきゃ」という固定観念がある。言っていることが非科学的だと私は判断したからそう書いたのだけれど、「電力会社の回し者」というレッテルをはられて、会社に何十人も抗議の人が来て、大変でした。行政側がまちがっていたら批判する。市民運動にも同じではないのでしょうか。

—女性で初の、本社のデスクになりましたね。

科学部デスクを5年やりました。どうやって男の人たちに、気を悪くせず働いてもらうか、真剣に考えました。

—論説委員もまた、「女性初」でした。

提言する、世の中を変える社説を書こうと思い、最初は「ここが良くない、あそこが悪い」という社説を書いたけど、それでは世の中変わらなかった。

次に「こうやればうまくいく」という例を外国で探して示した。4年くらい言い続けたら厚生省に介護対策検討会ができて、「介護は家で嫁がやるもの」という考えが少し変わった。けれど外国の例ばかりだと「背景の制度が違う」「北欧かぶれ」と。

それで、日本のなかで出来ているところを探して書くようにしていきました。

何が説得力があるかという点、①ダメと否定するのではなく、希望をそえる②具体的なやり方を示す③できれば、日本のなかでの実践例を採り上げる。

女性たちの自殺防止?! ネットつくる

—女性の働く環境としては、どんな点が変わりましたか。

理不尽なこととして、時間外賃金（打切り）が男女別で、同期と毎年1万円ずつ差が広がっていく。昇給査定も、男性のグラフの山と女性の山が違った。私自身もずいぶん働いたなと思ったのにD査定つけられて、部長に聞きに行ったら、「君はダンナがいるんだから」

給与の男女差をなくすために、社内に立て看板を立てて、^{はた}秦正流労担を女性たちで紅茶とサンドイッチで迎えて、団交。笑顔とデータで説得しました。松井やよりさんの外国での仕事ぶりを説明したり、切り崩し工作に負けないように、いろんな職場の女性の間で回覧板回したりして、1971年に男女同一賃金にこぎつけました。

—女性記者の定期採用が始まったのが、70年代後半だそうで。まだ数が少なかった時代、支局に行く前に、大熊邸でごちそうになって先輩の話を聞かせてもらいました。働き始めて、あるいは労組役員をしたときには、「夜の何時でも電話していい」「困ったことがあったら、名乗らなくてもいいから電話して」と言っていたら、本当に支えられ

ました。でもなんで、そんな大変なことを始めたんですか。

ノイローゼになる人が多くて、今で言えば「自殺防止のためのセルフヘルプ・グループ」のつもりだったの。初めは新人女性記者だけ呼んだのだけど、私は地方支局で勤務していなかったの、支局勤務中の先輩も呼んだ。そしたら、ジーパンが動きやすいとか、具体的な話が出るようになった。でもそれが男性陣から「派閥結成」と言われて悲しかった。

—辞めたい、と思ったことはありますか。

ないですね。どうしてかなあ。私が辞めたら「女はダメだ」と言われるに違いない、それがたったひとつの理由かもしれない。

—お嬢さんの職業選択にも、大熊さんの仕事は影響を及ぼしたようですね。

小さいころは、「遊園地に連れていってくれない」「雨が降っても迎えに来てくれない」と、すごく言ってた。

「ママー」ってスカートにしがみつかれると、そんなに人に必要とされることないから、うっとりしちゃうんだけど、子どもが寂しがるのは長い人生のなかではつかの間のこと。

帰宅すると「会いたかったあ」って駆け寄って、娘をぎゅーって抱きしめた。「熊五郎」って呼んでいたぶんかぶかの茶色いイスに二人で座って、秘密の話を共有した。娘は結局、リハビリの専門医になりました。

—4月からは、何を教えるのですか。

学部では、前期が「福祉とメディアの人間科学」、後期が「医療とメディアの人間科学」。大学院では「介護保険と地方自治法改正 市民と首長と自治体職員の態度変容」というテーマで、滋賀県と京都府を比較します。

注① [日赤産院名誉院長連続ミス事件](http://www.yuki-enishi.com/accident/accident-03.html)

<http://www.yuki-enishi.com/accident/accident-03.html>

注② [医療記事～秘密にしてきたこと、大変だったこと、感謝していること](http://www.yuki-enishi.com/lounge/lounge-11.pdf)

<http://www.yuki-enishi.com/lounge/lounge-11.pdf>